

なつかしのバツケの原

坂道 はらっぱ 川の音
桜に 柿の木 竹ばやし
今日は
どの坂のぼって 帰ろうか
そうだ 御りょうさんの坂
あそこにしよう
見える みえる 西の空
夕焼けにそまった 富士山だ
オリエンタルの
エントツも見える
のんびり走る 西武電車
バツケの原も
そろそろ くらくなる
早く はやく
おうちに帰ろう



昭和10年ごろのバツケの原 今の御霊橋あたりで妙正寺川を渡っている
右手の山は現目白学園の丘で崖が崩れた跡が見える（コミュニティおちあい
あれこれ）

坂のあるまち中井台地の西側を、八の坂に向かって坂下の道を歩いて行くと左に落合公園、その先を道なりに曲がった辺り一帯を「バツケの原」、「バツケ」と呼び、ついこのあいだまで、この風土詩のようなのどかな武蔵野の面影が残っていました。

「バツケ」は一面の「くさっぱら」。原野化してススキが背丈ほど伸びている所だけでなく、春になると、レンゲの花畑では、女の子たちが花冠や首飾りを作って遊びました。湿地帯では、ノビル、セリなどの野草が自生し、川筋には養魚場、セイヤの池、と先人たちの思い出のスポットでもありました。

中井台地崖下は「バツケ」の語源「水の流れ落ちる所」のとおり、豊かな水流がありました。今も変わらず流れる妙正寺川の川筋「葛橋」付近を「塚田」といって、この名は某氏の古墳があったからと伝えられています。目白大学の西崖下には今は暗渠となった川の一つで江戸時代、江戸のまちの飲料水としてつくられた「旧千川上水分水」が流れ、「御霊橋」辺りを「山下」と言って「丸塚」がありました。ある人は「平将門塚」と語り、また室町時代の江古田沼袋の合戦に討ち死にした兵たちを葬った塚とも語られています。子どもたちが「バツケ」にはお化けが出るぞとおどかされたわけは、この「丸塚」のためだったのかもしれませんが。

「バツケの原」は水田地帯でありました。江戸が明治へと移り変わった時、知行者（直参旗本）は自国に帰り、幕府の領地は国有地および村人へと払い下げられました。大正時代に崖が崩れて赤土が露出したころから、西落合の人は「赤バケ」と呼び、上落合の人は「御霊橋」から西を「バツケの原」と呼んでいました。

また、妙正寺川流域と目白大学周辺では、旧石器が発見され、縄文・弥生時代の古代人が暮らした大集落がありました。その古代人は奈良時代初期、忽然と姿を消しました。

何処に行ったのか？

バツケの原には、江戸時代以前からの歴史、伝説とロマンあふれる里山がありました。古いまちの文化と新しいまちの文化がとけあったそれが「落合の魅力」です。

(落合第二地域センター広報誌「おちあい」105号掲載)